



ロボットとモモの
うちゅうりょこう

ふじいひろまさ

楽しみの始まり

僕はレッド。七色小学校に通う小学生。髪の毛が赤いからみんなにそう呼ばれるんだ。

これから仲良しのモモちゃんとホワイト博士の研究所に行くところ。

とっても変わり者の博士がすごい所に連れて行ってあげるって言うんだもん。

でもモモちゃんは、博士がどこへ連れていくんだらう?ってちょっと心配そう。僕はなぜかワクワクして楽しみなのにな。

一体どこへに連れて行ってくれるんだろ?



<オレンジ号>発進!

僕とモモちゃんがホワイト博士の研究所に着くと「やあレッドくん、モモちゃん、待ってたよ」ってホワイト博士とイヌのブラウンも「ワン!」とあいさつ。

「さて、今日いくところはすごいぞ!わしが大発明したこのロケット<オレンジ号>に乗って宇宙へ行くんじゃない!」

外をみると、大きなオレンジ色のロケットがある!でもちょっとつぎはぎとかがあってへんてこりんなロケットだなあ。

「本当に飛ぶの、これ?」僕もモモちゃんもちょっと心配になってきた。「だいじょうぶじゃ、ちゃんと飛ぶぞ。まだ試しておらんがの。さっそく行こう。乗った乗った!」「えーまだ実験もしてないのー!?!」僕たちは博士に背中を押されてロケットに乗り込んだ。

「わあ!」中に入ると驚いちゃった。見たこともない機械だらけ!「ボタンは触らないでおくれよ」博士が言ってる。あれ?一緒にブラウンも乗ってきた。「一緒に行くの?」「モチロンじゃ、なあブラウン」「ワンワン!」元気よく吠えてる。ブラウンは楽しみみたい。

「それでは準備も出来たし、出発しようかの。みんな席について。」みんな近くのいすに座ると、ゴゴゴゴゴ…音がし始めた。博士が機械を触りながら数えはじめた。「5、4、3、2、1、それ発射!」

ドドドドドド…



「わあああああ!」あまりにうるさくてビックリしたけど、オレンジ号はゆっくりと空へ昇っていく。

ドドドドド…どんだん町が小さくなっていく!ふわふわの雲もつきぬけ高く高く昇っていく。

だんだんと青い空が暗くなってきたころ、博士が「もういすをおりていいよ。宇宙に着いたよ」

窓の外を見ると窓一面にキレイな星空が。

「すげー!」「きれーい!」僕もモモちゃんも初めての宇宙に大興奮!

博士が「宇宙はきれいじゃろう。キラキラと星がかがやいておるじゃろう。でも、これでおどろいてちゃいかんぞ。もっと楽しい所へ連れて行ってあげよう」「どこへ行くの?」とモモちゃんは宇宙にきて嬉しそう。

「宇宙は広いからのお。いろんな星へ行ってみよう。そうだな、まずは近くにあるモコモコ星にしよう。楽しい星じゃぞ」博士はまた機械を触り始め「ではもっと速く飛ぶぞー!それ!」ドドドーン!

ロケットはすごいスピードで飛び始めた!モコモコ星だって。どんな星なんだろう?僕たちは楽しそうに窓を眺めてた。

モコモコ星

しばらく猛スピードで飛んでると、「さあ、見えてきたぞ。あれがモコモコ星だよ」窓からフワフワした白いかたまりが見えた。「綿菓子みたいね」「モモちゃんは面白いことを言うね。あの星は食べられないけど楽しい所だよ」博士が「よし、着陸するぞー」ドドドド…ポヨーン!



あれ?なんだ?「ポヨーンって何?」「はははは、着いたよ。外に出てみるといいよ。すぐにわかるから」僕は「それっ!」っと飛び降りると、ポーン!飛んではずんで思わず転びそうになっちゃった。「わわっ!」「気をつけるんじゃぞ。ここがモコモコ星。フワフワモコモコと遊べる所じゃ」「わあー!トランポリンみたい!」モモちゃんは得意げにポヨンポヨン飛び跳ねてる。うまいなー!僕も負けてられないや。何回か跳んでるうちに「モモちゃん、どっちが高くとべるか競争だー!」「負けないわよー!」ふたりで飛んだり跳ねたり大騒ぎ!博士が遠くから声をかけてきた。「レッドくーん、モモちゃん、あまり遠くに行くんじゃないぞー」「はーい!」



イヌのブラウンは「わわわん!?!」飛び跳ねたのにビックリしちゃって慌ててる。ブラウンはすたすたと不機嫌そうにオレンジ号に戻っちゃった。

「ははは、ブラウンはこの星がお気に召さなかったようだねモコモコ星には大きいのも小さいのもいろんな形のモコモコがあるんだよ。」

博士の言うとおりに、いろんなモコモコが浮いていた。

モモちゃんはドーナツみたいなモコモコを被って「うきわー!ぷかぷか浮いちゃうー」って遊び出した。「ははは、かわいいー!似合うね!」

じゃあ僕はモコモコを頭に被って「ヘルメットー!ぶつけても痛くないぞー」「あはは、かつらみたーい!」

他にもモコモコのトンネルをくぐったりこしたり、フワフワの橋を跳んで渡ったり!モコモコしてるから頭から当たっても痛くないし!遊園地みたいでとっても楽しい!

二人でキャアキャア騒ぎながら遊んでると、博士が「もうだいぶ時間が経ってしまったの。楽しい変てこな星は他にもまだまだある。次の星へ行くことにしよう」

「えーもうそんな時間がたったの!?!まだ遊びたいのになー」

僕とモモちゃんはオレンジ号に戻りました。

「さあ!次の星へ行くぞー!」博士はオレンジ号を発進させました。

みらくる宇宙バー

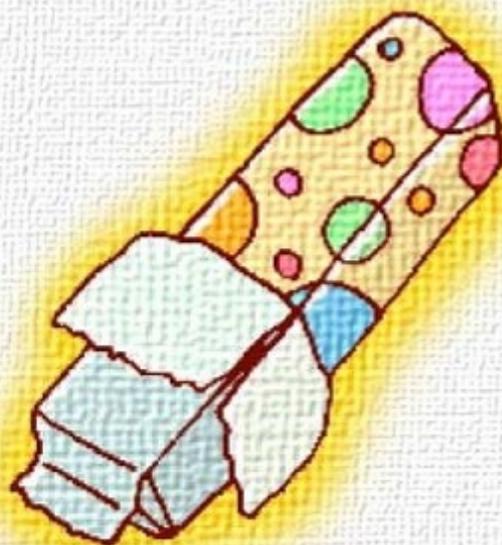
「たくさん遊んだからお腹がへったろう。これを食べるといいよ」博士はそう言ってレッドとモモに棒の形の食べ物をくれました。

「これはわしが作った宇宙食『みらくる宇宙バー』じゃ。なかなかうまいぞ」

ちょっと見た目が茶色くってなんだかまずそうだけど、僕たちは食べてみた。

みらくる宇宙バーは、チョコとホットケーキとカレーとスパゲッティミートソースを混ぜたみたいな味で、とってもおいしい!

僕は「おいしーい!こんなの食べたことないよ!」思わず叫んじゃった。モモちゃんも気にいったみたい。



ミズミズ星

僕たちが夢中で『みらくる宇宙バー』を食べていると、「そろそろ着くぞ。次の星はミズミズ星っていうんじゃ」

どんどんロケットが星に近づいていくと、七色したキラキラしたものが見えてきた。

「よし着陸じゃ！」ざぱ————ん!

あれ?ざぱ————ん?ロケットが船みたいにユラユラゆれてる。「ここがミズミズ星。水と緑がいっぱいの星だよ。」博士が言うと「え?それじゃ僕たちの星と一緒にじゃないの?」とレッドがいました。「ははは、ここは大きさが違うんだよ、何もかも。出てみるといいよ。」

おりてみると「うわあ!」辺り一面は水だらけ。しかもキラキラして七色に光ってる!「この水はあまりにきれいで虹色に光るんじゃよ」

しかもとなりに大きな木が。「おおきいなー!」「デカデカの木じゃ。葉っぱも大きいだろう?」博士はそう言うと葉っぱを一枚「よっこらしょ」といいながら取って水に浮かべました。

「ほれ、船になった」大きな葉っぱが船みたい!「さらに、もう一枚葉っぱをこうして船に立てると、出来た!ヨットじゃ!」大きな葉っぱで作ったすてきなヨット。





「ほれ、乗ってみなさい」「えーヨットなんて始めてだよー」レッドは心配そう。「なーに、こうやって乗ってみなさい」博士の言うとおりにレッドは乗ってみると、ヨットはスイスイと進み始めました。

「わわわわ!」最初はビックリした僕もだんだんと慣れて楽しくなってきた。「わーい!すごーい!水の上を走ってるみたいだー!」「レッドくん!私も乗せてー!」モモちゃんも乗りたそう。「一緒においで!それっ!」

僕はモモちゃんをヨットに乗せてスイスイ!「わー気持ちいいー」葉っぱのヨットは右へ左へ水の上を走っていく。

「あ!ブラウンが泳いでる!」モコモコ星は苦手だったブラウンもここでは楽しそう。「ブラウンは泳ぐのは得意じゃなからな」博士はロケットでのんびりくつろぎながら言いました。

僕とモモちゃんは遊び疲れると、葉っぱの舟でのんびりお昼寝。ハンモックみたいにゆらゆら揺れて気持ちいい。うとうとしていると、「ゆっくりできたかの?そろそろ出発するよ」博士の声が。とても気持ちよく寝てたのにな。「すごいきもちのいいところだったなあ」とモモちゃん。「よく寝ていたね。体力も回復したところで、次の星に行くぞ!」

オレンジ号はミズミズ星を離れていった。

メーロメーロ星

「やっと見えてきたぞ。今度の星はメーロメーロ星。ちょっと頭を使うぞ」博士は意地悪そうに言いました。

「なんだよー。ばかにしてるだろ。確かに勉強苦手だけど…」言い返せないのがくやしいや。

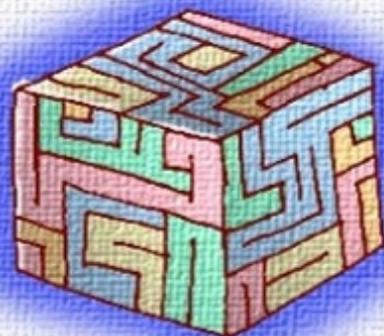
「何かお勉強する星なの？」モモちゃんが訪ねると、「勉強するわけではないのじゃが、まあ着いてからの楽しみじゃ」

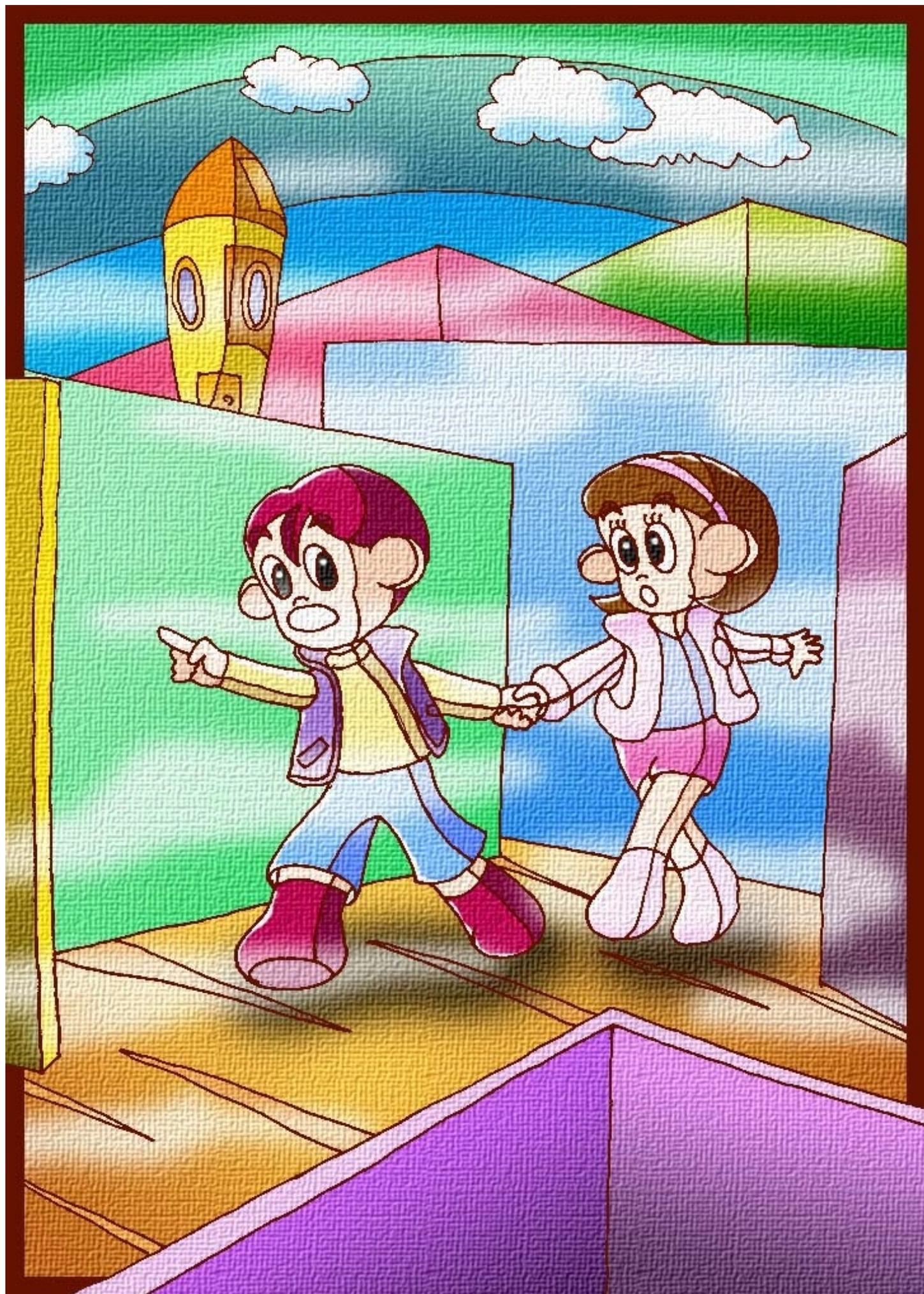
窓を見ると、なんだか四角いサイコロみたいな星が見えました。

「よし、降りるぞ」オレンジ号は着地しました。

「外に出てごらん」博士のいうとおりに出してみると、周りは壁だらけ。「ここがメーロメーロ星。星全体が迷路になっているんじゃ」よくみるとところどころに通路がある。

博士が「せっかくじゃ、みんなで競争しよう。ちょうどここがスタートじゃ。みんなであの通路から入って、オレンジ号の後ろの通路から出てきたらゴールじゃ」「よーし、負けないぞー!」「私も負けないからねー」





ヨーイドン!って入ったけど、さっそく行き止まり。ありー?
じゃあ、今度はこっちってまた行き止まり!?僕って方向
音痴?

「あれー?前に進まない!」「これは難しいのお」あちこち
から声だけが聴こえてくる。

それから、色々行ったり来たりして、迷いながらやっと僕
がオレンジ号についたらビリだった。

「遅かったじゃない、レッドくん。1番はブラウンよ。」ブ
ラウンは誇らしげだ。「すごい難しかったんだもんなー」
「でも良い頭の体操になったじゃろう?」博士はオレンジ
号に戻っていきました。

「出発するの?」「ああ、思ったより時間がかかったからの」
「それって僕のせい!？」

みんなで大笑いしながらオレンジ号に乗り込みました。

モグモグ星

博士が「そろそろ、お腹が減ったろう。おやつにしよう」「またみらくるばーかな?」「いやいや、おやつに良い星がある。そこまでいこう!」

あ、甘い匂いがしてくる。窓をみると、でっかいケーキの形をしたものが!

「あれがモグモグ星。すべてが食べられるおやつ星じゃ!!」

星に降りてみると地球と似たような景色に見えるんだけどなあ。

「あ、キレイなお花!」モモちゃんが手に取ってみると「これ飴!?!」

「言ったじゃろう。ここはすべてが食べられる星じゃと」

「この木は…チョコレートだ!」僕は思わずかじりついた!

「ほろ苦くてあまーーい!」

近くに川が流れてる。「これは!オレンジジュースだ!おいしーい!」

「レッドくん、モモちゃんにはたまらないじゃろう。沢山あるから好きなだけ食べなさい、おっとブラウンは虫歯になるからダメじゃぞ」

「わーい!」二人ともなんでも手にとって食べてみた。





キャンデーの花、綿菓子雲、地面のビスケットとチョコレート、グミの石。どれもすっごい美味しい。

僕もモモちゃんも夢中で食べちゃった。

「あーお腹いっぱい」僕は満足。「私はあとグミ食べよう」と「モモちゃんはすごいなあ」「だって女の子は甘いもの大好きだもん」

モモちゃんがまだ食べているとブラウンはひとり寂しそう。「ねえ博士、ブラウンにもビスケットくらいならいいんじゃない？」

「仕方がないのお、ちょっとだけじゃぞ」ブラウンは急にしっぽをふって僕に近づいてきた。

「はい、ブラウン」葉っぱのビスケットを1枚だけあげると喜んで食べてくれた。

さあ、おやつも終わりにして出発しよう。

「えー!?あとキャンデーも食べたーい!」

「モモちゃんは食いしん坊だなあ」みんな大笑い。

モモちゃんは両手にお菓子をいっぱいに取り込んでオレンジ号は出発しました。

宇宙遊泳

「そろそろ地球に近づいてきたのお。外へでて直接見てみるかい?」「そと?」不思議そうなモモちゃん。「宇宙遊泳じゃよ!」

「宇宙に出れるんだ!」僕はワクワクしてきた。「せっかく宇宙にきたんだから、体験するのも良かろう。では、宇宙服を着て、と外へ出るぞ!」

「うわわ!」ほわほわ~としてジタバタしてもまったく進まない。「宇宙は空気がないから動きづらিদらう?じきになれるよ、ほれ上を見てごらん。地球が見えるよ。」

すごい大きな地球が上に見えた。

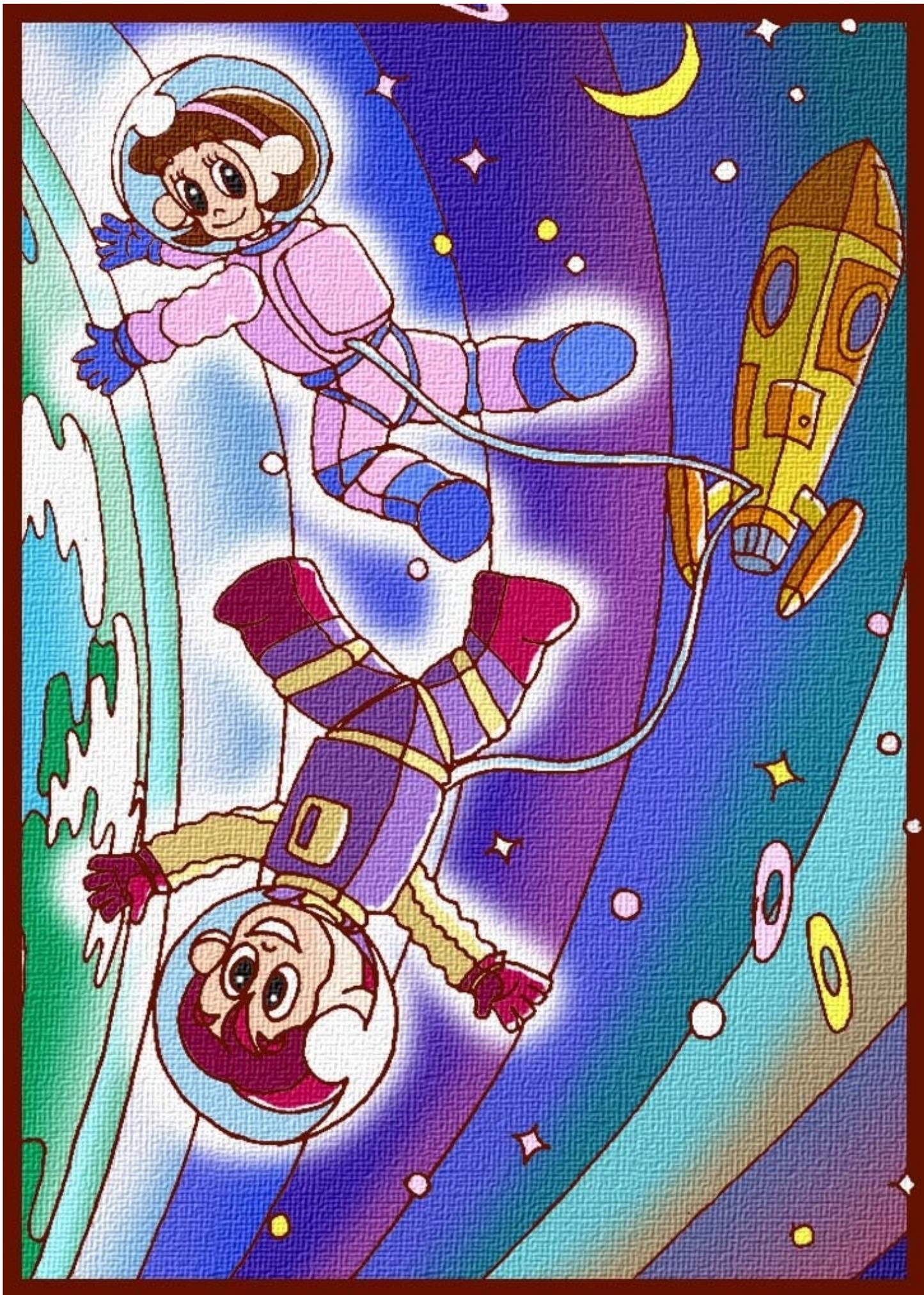
「地球ってきれいだね」「うん」「とっても青くて、緑があって、宇宙の宝石みたい!」

博士は「レッドくんもモモちゃんもこんなキレイな星に住んでいるのじゃぞ。もっと大切にしないとな。」

「どうやって?」「たとえばゴミを捨てたりしないとか、身近にできることは沢山あるんじゃないかな」

僕たちの住んでいる地球がこんなにキレイだって初めて知った。

「さて、そらの散歩は楽しんだかな?そろそろみんなの地球に変えるとしよう」



地球

オレンジ号は博士の研究所に無事に着陸しました。

「ぼく、とっても楽しかった」モモちゃんも「あたしも感動した」

「ははは、そりゃ良かった。また今度おいでなさい。素敵なところに連れて行ってあげよう。今度は海の底かジャングルか？まだまだステキなところはいっぱいあるぞ！」

僕はまたワクワクしてきちゃった。「また連れて行ってね」
「あたしも行くー！」

「さ、今日はもう遅い。早く帰りなさい」

「うん、じゃあねー！博士ありがとう！モモちゃんまた遊ぼうねー！」

あー今日は楽しかった。

